

## 自主企画 第1日目 7月24日(日)

24-J-01 7月24日(日) 19:00~21:00 大会議室

### 発達障がい傾向のある大学生・青年とその支援 —保護者の声と、当事者が貢献可能な心身ケアプログラム—

**企画者:** 田中康雄# (北海道大学)・山田順子 (東京家政学院大学) **司会者:** 田中康雄# (北海道大学) **話題提供者:** 横倉江美子# (NPO 発達障害の会神奈川オアシス)・山田順子 (東京家政学院大学) **指定討論者:** 篠田晴男 (立正大学)・高橋知音 (信州大学)・田中康雄# (北海道大学)

#### 【企画趣旨】

平成17年4月施行の「発達障害者支援法」には、「大学及び高等専門学校は、発達障害者の状態に応じ、適切な教育上の配慮をするものとする」とある。

企画者らは、平成20・21・22年と、大学における当事者支援の実態や課題について、「実際に支援をしている大学教員」「大学教員でもある医師」「大学教員でもある就労支援のNPO関係者」と話題提供し、参加者と共によりよい支援について考えるシンポジウムを開催してきた。

現状は、決して楽観できないものではあるが、「知識と体験に裏付けられた生活の質の向上を目指す工夫が支援となる」という思いを重ねてきた。生活の質の向上とは、共生する折りあいのなかで創造されていくものである。そこに浮上する支援の範囲と負担について、高橋(2010)は合理的配慮(reasonable accommodation)を一つの指針とする。これは、適切で理にかなった環境調整という意味でもある。当事者が調整された環境に置かれるのではなく、当事者が適切な環境調整を求めるということを前提に、支援する側にとっても過剰な負担にならない公平性が保障される、という相互にとって理にかなった取り組みといえる。その意味では、専門職にある支援者側のみの議論から、当事者や保護者との議論が求められる。

24-J-02 7月24日(日) 19:00~21:00 820 研修室

### 広汎性発達障害児へのSSTや認知行動療法について考える —教育フィールドにおける実践・効果と課題について—

**企画者:** 橋本創一 (東京学芸大学教育実践研究支援センター)・霜田浩信 (群馬大学教育学部) **司会者:** 橋本創一 (東京学芸大学教育実践研究支援センター) **話題提供者:** 橋本創一 (東京学芸大学教育実践研究支援センター)・霜田浩信 (群馬大学教育学部)・大久保賢一# (北海道教育大学教育学部) **指定討論者:** 栗原治子# (調布市柏野小学校)・三浦巧也 (杉並区教育委員会/東京学芸大学連合学校教育学研究科)

#### 【企画趣旨】

ソーシャルスキルトレーニング(SST)は社会心理学の理論的研究に源流をたどることができるが、単に表出された行動に限定されず行動に影響を及ぼしている個人の認知・感情を包含した立場に基づき、臨床的な視点・技法の導入から認知行動療法(CBT)の一つとしても位置づけられている。現代では、臨床的介入の色彩よりも、社会性の教育や社会的マナーなどの学び方の一つとして誰でも・どこでも活用される形態が導入されている。一方、CBTは認知療法の考え方をもとにして行動療法のあらゆる技法を用いることから、行動分析の技法やSST、アサーショ

ントレーニング、モデリングなどの具体的な行動支援・形成の技法、行動活性化や認知再構成などの認知面の変容を促す技法などの様々な療法の集合体といえる。SST と CBT は、今日では教育フィールドに様々な形態・方法などで導入・応用されている。通常学級に在籍する広汎性発達障害児（PDD 児）のコミュニケーション支援に対して、個別・集団による SST の導入が通常教室・通級指導教室などで盛んに実践されている。また、相談室やクリニックなどで、PDD 児にみられる不安や過敏さ、強迫症状、こだわりなどへの支援として、CBT を中心とした認知・行動・感情表現のゆがみにアプローチする精神療法・カウンセリングが取り組まれている。本シンポジウムは、その実践や効果について整理し、学校を中心とする教育フィールドにおける導入の実際と課題について考える。第一に、PDD の障害特性への直接的な介入としての有効性と、その症状に起因する行動上の問題や情緒的問題などの二次的な問題への支援方法としての導入であるのかについて、第二に、教育フィールドに適した SST や CBT の実際的なプログラムについて、第三に、実際の指導・介入場面や個別・集団の形態、指導者・カウンセラーの立場（教師・心理士・保護者など）などの違いについて、各々の視点から話題提供し、効果と課題について討論する。

24-J-03 7月24日（日） 19:00~21:00 710 会議室

### 多文化の子どもの算数・理科学習 —認知研究と文化研究の対話—

**企画者:** 榊原知美（東京学芸大学） **司会者:** 伊藤貴昭（北陸大学） **話題提供者:** 多鹿秀継（神戸親和女子大学）・榊原知美（東京学芸大学）・長倉 若（コロンビア大学）・高木光太郎（青山学院大学） **指定討論者:** 梶田正巳（相山女学園大学）

#### 【企画趣旨】

多文化の子どもの学力に関する国際比較研究では、数多くの国において、ネイティブと移民の子どもの間に学力差があることが報告されている（例えば、OECD、2006）。日本でも同じような学力差が存在することが、近年、重大な教育上の問題の一つとして指摘されている。

子どもの学習は、家庭での経験、幼稚園での保育、学校での授業、地域での活動をはじめとする様々な文脈で、またそれらの文脈を移動しつつ行なわれる。これらの文脈はより広い文化の一部であり、様々な共通の媒介物（言語、慣習、信念、物理的道具など）によって、文脈間を移動する子どもが連続性をもって学習できるシステムを形成している。このため移住などによって新たな文化で生活することになった子どもの学習には、たとえば家庭では移住元の媒介が使用され、学校では移住先の媒介が使用されるといった齟齬による複雑な困難が生じると予想される。

本シンポジウムでは、これまで明らかにされてきた子どもの算数・理科学習の過程に関する知見を踏まえ、文化間の移動が子どもの算数・理科学習にどのような形で寄与し、またそれを阻害しているのかについて考えたい。これにより、多文化の子どもの学習困難の特徴に関する理解を深めるとともに、学習支援を構想するための新しい視座を得ることを目指す。

24-J-04 7月24日（日） 19:00~21:00 1040 会議室

### 子どもの安全：ネット社会での子どもの被害と加害を防ぐには？

**企画・司会者:** 小泉令三（福岡教育大学） **話題提供者:** 中村健二#（立命館大学情報理工学部）・片山雄介#（特定非営利活動法人青少年メディア研究協会）・宮原紀子（福岡県岡垣町立岡垣中学校）・山田洋平（福岡教育大学）

**指定討論者：**竹内和雄（大阪府寝屋川市教育委員会，文部科学省学校ネットパトロールに関する調査研究協力者）

### 【企画趣旨】

子どものインターネットや携帯電話の利用に関係した事件やトラブルが，学校や地域社会で大きな関心事となっている。問題が明らかになった段階での対応方法だけでなく，事件やトラブルを未然に防ぐために，学校や保護者を含めた関係者一同が協力して取り組むネットワーク形成が必要である。

本シンポジウムでは，こうした問題意識のもとに，科学的・心理学的手法を用いて，ネット社会で子どもを被害者や加害者にしないための方策に取り組んでいる関係者から話題提供を得て，今後の取組を参加者がともに考えていく機会としたい。

まず，1) 電子掲示板やプロフィールサイトなどを継続的に監視する手法の取り組み，次に 2) ネットの見守り情報を生かした学校への支援の取組，そして 3) 中学生を対象にした，対人関係能力と自尊感情の育成による規範行動向上の試みについて話題提供する。これらをもとに，指定討論者による討論を中心に会場の参加者も加えて考えていきたい。

24-J-05 7月24日（日） 19：00～21：00 1030 会議室

## アドラー心理学による子ども・家庭支援（3）——「共同体感覚」を中心に——

**企画・司会者：**会沢信彦（文教大学） **話題提供者：**深沢孝之（山梨県立北病院）・高坂康雅（和光大学）・原田綾子（Hearty Smile）・赤坂真二（上越教育大学） **指定討論者：**河村茂雄（早稲田大学）

### 【企画趣旨】

本学会第51回総会，第52回総会の2回にわたり，自主シンポジウム「アドラー心理学による子ども・家庭支援」および「アドラー心理学による子ども・家庭支援（2）——『勇気づけ』を中心に」を開催し，心理臨床，家庭教育，学校教育など，子ども・家庭支援の諸領域におけるアドラー心理学の可能性について議論を行った。本総会では，その第3弾として，特に「共同体感覚」に焦点を絞った議論を行う。

「共同体感覚」は，アドラーが後年もっとも重視した概念であるとされているが，明確な定義は存在せず，説明が困難な概念でもある。

そこで本シンポジウムでは，それぞれの場でアドラー心理学を活かした卓越した実践を行っている方と実証研究に取り組んでおられる方に，「共同体感覚」を中心とする話題提供をしていただく。

一昨年，昨年に引き続いて，本シンポジウムを通して，我が国の子ども・家庭支援におけるアドラー心理学の有効性と課題を明らかにすることができればと願っている。

24-J-06 7月24日（日） 19：00～21：00 730 研修室

## ラウンドテーブル：べてる式当事者研究の研究

**企画・司会・話題提供者：**いとうたけひこ（和光大学） **話題提供者：**向谷地生良#（浦河べてるの家／北海道医療福祉大学） **話題提供者：**小平朋江（聖隷クリストファー大学）

## 【企画趣旨】

これまで、向谷地らのおこなってきた浦河べてるの家の当事者発展のための意見交換を行う。

北海道の浦河べてるの家から発した当事者研究は、当初の地域における精神障害者の自助的な活動をこえて、全国的な運動になりつつあるとともに、その「苦労」の範囲も発達障害などの障害における問題、さらには現代社会における矛盾をもっている広範な人々において「誤作動」「爆発」にどう対処するか、また「お客さん」にどうつきあっていくかなど、一般化の過程が進行している。

小平・いとうは2010年より、精神障害を含む慢性疾患についてのいわゆる闘病記と呼ばれる、体験に根ざした「病いの語り」を視聴読することにより、「ナラティブ教材」としての物語りの教育的活用を提起している。浦河べてるの家はナラティブ研究の対象として興味深い。われわれは、当事者研究のプロセスとアウトカムを、構成的 (constructive)、協同的 (collective)、創造的 (creative) の3Cとして特徴付けた。それにくわえて、ユーモア、場当たり性、暖かみ、巻き込み力など、様々な角度から、当事者研究を位置づけたい。

24-J-07 7月24日(日) 19:00~21:00 720 研修室

## 野外教育によるコミュニケーションスキル獲得の新展開

**企画者：**西田順一（群馬大学教育学部） **司会者：**柳 敏晴#（名桜大学人間健康学部） **話題提供者：**中島俊介（北九州市立大学基盤教育センター）・藤永 博#（和歌山大学経済学部）・江口達也#（大阪体育大学大学院）・手島史子（山口短期大学児童教育学科）・榮樂洋光#（鹿屋体育大学海洋スポーツセンター） **指定討論者：**橋本公雄（九州大学健康科学センター）

## 【企画趣旨】

近年、わが国ではITの著しい進化やその定着から、若者のコミュニケーションスキルが低下を示してしている。このことは、単に対人関係上のつまずきに留まらず、いじめやひきこもり、不登校などの非社会的行動と結びつく可能性が否定できない。

このような背景より、コミュニケーションスキル支援のための技法やプログラム開発に関する研究が盛んに行われている。たとえば、近年、Social Skill Training (SST) が学校現場にて多く採用され、また様々な対象者に応じたアレンジが施され、介入成果が数多く報告されている。しかし、既存の研究は、フォーマルエデュケーションとしての枠組みでの実践研究が圧倒的に多い。すなわち、コミュニケーションスキルの支援を「学校」というフォーマルな場面に依存し、そこでは教師からの指導や教育を中心としている。

コミュニケーションは必ずしも意図的、計画的でなく、カテゴリや話題性が存在せず、偶発的に展開される場合も少なくない。よって、コミュニケーションスキルの支援は学校内だけにとどまるものではない。

本自主企画では、とりわけ体験学習の1つである「野外教育」をコミュニケーションスキル獲得の有効なプログラムとして捉えている。野外教育は、インフォーマルエデュケーションに位置づけられ、お互いの参加者からの学び合いが鍵となる。体験の場では、種々のトライ&エラーを繰り返しながら学ぶことから、学習成果が持ち越されやすいことも知られている。

本企画では、話題提供者に野外教育を応用したコミュニケーションスキル向上のための実践プログラムを予備研究のデータに基づき紹介して頂く。プログラム実施上の工夫やプログラム実践による心理的効果、そして今後の課題などについても合わせて言及して頂き、より効果的なプログラム開発に向けた議論を行う。

24-J-08 7月24日(日) 19:00~21:00 特別会議室

## 喪失体験のある子どもを学校でどのように支えることができるか

**企画・司会者:** 小林朋子 (静岡大学教育学部) **話題提供者:** 茅野理恵 (長野県スクールカウンセラー)・小林朋子 (静岡大学教育学部)

### 【企画趣旨】

2011年3月11日に発生した東日本大震災により、多くの尊い命が奪われた。家族や友人を失った経験をした人は数え切れず、その中でも子どもたちのケアをどのように進めていけばよいか非常に大きな問題となっている。子どもも、そして教師自身も大切な人を亡くした喪失体験を抱える中で、学校でのケアについて多くの先行研究や経験から議論を重ね、支援を進めていかなければならない。

災害だけではなく、自殺者も年間3万人を超える状態が11年連続で続いている。被災地、そして被災地以外でも、大切な家族や友人を失った体験を抱えている子どもは少なくない。こうした災害、自殺、事件・事故、そして転居(避難のための転居も含む)など、大切な人、存在、場所を失う喪失体験は「喪失反応」を引き起こす。喪失反応は、抑うつ、不安だけでなく、免疫や内分泌の低下など、心や体に大きな影響を与えることが明らかになっている。

平成22年7月に出版された文部科学省の資料「子どもの心のケアのために」では、心的外傷後ストレス障害(PTSD)への対応は記載されているものの、子どもの喪失反応や学校での対応方法に関しては述べられていない。つまり、大切な人や存在を亡くした子どもへの支援については、国レベルでも具体的な支援内容の指針が出ておらず、学校現場で経験的に行われているのが実情なのである。東日本大震災の被災地での支援体制を日本社会全体で考えていかなければならない状況をふまえると、喪失体験を抱えた子どもたちへの支援も緊急の課題であると言える。

そこで、本企画はラウンドテーブルの形式をとり、参加者と共に、喪失体験のある子どもへのケアに関するそれぞれの経験を語る中で、学校でのケアについて議論していく。

24-J-09 7月24日(日) 19:00~21:00 1050会議室

## 関係性攻撃と心理・社会的適応との関連性の検討 ―幼児期から成人期まで―

**企画者:** 濱口佳和 (筑波大学大学院人間総合科学研究科) **話題提供者:** 桑原千明 (筑波大学大学院人間総合科学研究科)・関口雄一 (筑波大学大学院人間総合科学研究科)・梅津直子 (筑波大学大学院人間総合科学研究科)・濱口佳和 (筑波大学大学院人間総合科学研究科) **コメンテーター:** 戸田有一 (大阪教育大学)・金網知征 (甲子園大学)

### 【企画趣旨】

平成22年度から4年計画で行われている企画代表者の科研費基盤研究(B)「関係性攻撃と心理社会的適応との関連についての生涯発達心理学的研究」の研究成果報告会を研究分担者・連携研究者が発表する。発表内容をめぐって討論者とフロアの一般参加者による活発な議論により、幼児期から一般成人に至るまでの期間に亘って、関係性攻撃が人の心理社会的適応にどのような影響を持つのか、また関係性攻撃の個人差に寄与する要因等について理解を深め、今後の研究の課題を論議する。話題提供者はおおむね下記のテーマについて発表する。

24-J-10 7月24日(日) 19:00~21:00 510会議室

## 高等教育における自己調整学習のあり方

**企画者:** 犬塚美輪 (大正大学)・瀬尾美紀子 (相模女子大学)・塚野州一 (立正大学) **話題提供者:** 秋場大輔 (NY市立大学大学院センター)・犬塚美輪 (大正大学)・藤田哲也 (法政大学) **指定討論者:** 沖林洋平 (山口大学)・森 敏昭 (広島大学)

### 【企画趣旨】

技術や知識の革新が起り続ける現代社会においては、生涯学び続けることが必要である。自己調整学習 (Self-Regulated Learning) 研究は、学習者を能動的な存在として位置づける。「効果的に学ぶための姿勢や方法」を身につけ発揮する過程についての実証研究や介入研究が積み重ねられ、自立した学習者を育てるための有益な視座が提供されてきた (Schunk & Zimmerman, 1994, 1998; Zimmerman & Schunk, 2001)。

しかし、高等教育に関しては、その位置づけに鑑みた自己調整学習の観点からの研究が十分になされているとは言えない。そこで、本シンポジウムでは、高等教育の位置づけと、近年の日本における社会状況や大学の状況に注目して、高等教育における自己調整学習について改めて論じる。

まず、高等教育においては、「専門的知識を身につけ、自ら探求を行なう」ことが学習活動の主眼となる。知識はその後の職業生活に直接的間接的に活かされ、探究活動は生涯学習の基盤となるものとも言えるだろう。そのため、大学での学習については生涯学習の基盤として初年次教育がこれまで以上の注目を浴びようになっている。そこで、本シンポジウムでは、大学で/社会で自ら学ぶための知識やスキルを「自己調整学習」の観点から捉え、それをどのように育成していくかを議論する。

また、探究活動においては、読解が大きな役割を果たす。書いてある内容を正しく理解し、さらに検討すべき新たな問題見出ししていくことが必要とされる。こうした読み書き能力 (高水準リテラシー) の獲得も、高等教育における重要なテーマの一つと位置づけ、取り上げることとする。

最後に、多くの学習者は高等教育を経て職業に就く。学校的な文化から社会への参入を果たす移行期として高等教育を位置づけると、自己調整学習のあり方と、社会文化的背景、「成功」がどのような関係にあるかについても自覚的であるべきだろう。そこで、本シンポジウムの三つ目のテーマとして、文化と自己調整学習を取り上げる。

三つのテーマを通して、これからの高等教育における自己調整学習のあり方を議論していきたい。

24-J-11 7月24日(日) 19:00~21:00 940研修室

## 教師の学びの質を捉える —連続性の視点から—

**企画・司会・話題提供者:** 三島知剛 (岡山大学/教師教育開発センター) **企画・話題提供者:** 一柳智紀 (新潟大学)・坂本篤史 (東京大学大学院教育学研究科/日本学術振興会特別研究員) **指定討論者:** 藤江康彦 (関西大学)・金沢 緑 (広島大学大学院教育学研究科/前海田東小学校校長)

### 【企画趣旨】

教師は養成—採用—研修を通して段階的に発展的に成長するものである。しかし、近年の教師を取り巻く現状は決して明るいとは言えず、学校が抱える課題の多様化、複雑化の中で教師は多忙を極めている。それは教員養成大学に進学したものの、教職を志さない学生が決して少なくないことや、教師の早期退職、バーンアウトなどにも反映されている。このような現状から、教員養成段階から採用後に至るまで、教師の成長を支援していくためにも、

教師や候補生が何をどのように学んでいるかを明らかにしていくことは不可欠である。実際、こういった現状に対して国策レベルでは大学教育の充実や教員研修の充実等の対策が講じられつつあり、教育心理学の領域においても、教育心理学研究や教育心理学会のシンポジウム等で in-service training の取り組みや研究はもちろんのこと、pre-service training についての研究や発表が増えてきている。

しかしながら、教師の成長モデルを提起した研究や、教師の語りから長期の成長過程を検討した研究は散見されるが、養成段階と採用後における教師のリアルタイムの複雑な学びについては、研究上分離されており、その連続性について実証的な検討が十分になされていない。そこで、本シンポジウムでは、教師が“それぞれ何を学んでいるのか”、“学ぶ経験がどう異なるのか”、“それぞれの学びがどう関連し合っているのか”といった複雑な教師の学びの内実を、養成段階から採用後までを対象に幅広く検討することで、教師の学びの連続性を浮かび上がらせ、これからの教師教育に関する研究をどう展開させていくか、教育心理学でできることは何か、ということを考えていきたい。

このことを、養成段階における教育実習生の学びやそのプロセスを幅広く研究している研究者（三島）と、現職教師の学び（成長）や学びを促す要因について研究している研究者（坂本）と、実際の授業における教師と児童の相互作用に着目し、教師及び児童の学びについて幅広く研究している研究者（一柳）とが話題提供を行い、教育心理学者及び実際に現場経験をもつ研究者の指定討論を得て、教師の学びや学びの意味、経験の影響、課題などについて議論していく。

また、本シンポジウムは、教師の学びを捉える視点の提供やその意味づけを通して、これから教師を目指す学生や現職教員の方々に希望をもたらすことも企図している。本シンポジウムの企画者及び話題提供者である3名は、研究者としては駆け出しであるが、教師教育、ひいては学校現場に貢献できる研究を行いたいという志向性を同じくする者である。研究者のみならず現職の先生方や教育に関わる様々な立場の方にご参加いただき、ご指導ご助言をいただきながら議論を深め、参加者全員の学びを深めていきたい。

24-J-12 7月24日(日) 19:00~21:00 1010会議室

## 心理学研究・教育における理論の役割を考える

**企画・司会者:** 松本博雄(香川大学)・大久保智生(香川大学) **話題提供者:** 陳省仁(光塩学園女子短期大学)・伊藤崇(北海道大学)・加藤弘通(静岡大学) **ファシリテーター:** 川田学(北海道大学)

### 【企画趣旨】

この企画では、心理学における「理論」の役割について、主に心理学研究と心理学教育という2つの軸から考察を深めることをねらいとする。私たち心理学者にとっての「理論」の価値とは、それによって目の前の問題に対する新たな切り口がいかにか引き出されうるかという観点から位置づけることができよう。このことは、目的や方法論を規定するという意味で研究上の課題であると同時に、理論的な視点をもつことによってめばえる面白さと可能性を、どのように学生に実感させるかという教育的な課題でもある。「理論」は試験のための知識として覚える、決まった問いの答えを導き出すなどのために存在するのではなく、それをを用いることで多様な解釈のみならず、研究における問いそのものが新たに導かれることをいかに学生に示していけるのか。たとえば卒業論文や修士論文は、研究と教育の両者が結節するところに成り立つ、きわめて実践的な課題として理解することもできよう。

企画者の所属する「発達・理論研究会」は、2007年に「卒論・修論をはじめのための心理学理論ガイドブック」(ナカニシヤ出版)を出版するとともに、日本発達心理学会第18回大会においてラウンドテーブル「発達の理論を使いこなすー<ベタ読み>から<メタ読み>へ」を開催し、これらの問題についての議論を深めてきた。そこで

の問題意識を引き継ぐ今回の企画では、はじめに3人の話題提供者より、心理学研究・教育における理論の役割と問題点の現状について話していただく。その後はラウンドテーブル形式で進め、登壇者も含む全ての参加者が「心理学における研究／教育」の両面からそれぞれの「理論」について考察を深められる機会としたい。

24-J-13 7月24日(日) 16:00~18:00 550会議室

### 認知心理学と社会文化的アプローチのディベート 説明研究をプラットフォームとして

**企画・司会者:** 中野美香(福岡工業大学) **企画・指定討論者:** 清河幸子(中部大学) **話題提供者:** 深谷達史(東京大学/日本学術振興会)・伊藤貴昭(北陸大学)・富田英司(愛媛大学)・高木光太郎(青山学院大学) **指定討論者:** 比留間太白(関西大学)

#### 【企画趣旨】

近年、教育研究者・実践者の中で説明活動が注目されている。主な対象としては、説明による理解の促進や、説明スキルの獲得、説明文化の醸成などが挙げられるが、説明活動の全体的枠組みに関する研究の数は少ない。多様なアプローチからの知見が蓄積されようとしている今、理論的視座から説明研究の方向性を整理しようとすることは意義があると考えられる。そこで本企画では、これまで説明と学びに関して知見を蓄積してきた領域として、個人の説明活動に焦点を当てた認知心理学と、他者との協同による説明活動に焦点を当てた社会構成主義を取り上げ、それぞれの論客を招き説明を共通の土俵として説明研究の展望について考えてみたい。この試みを通して、説明について洞察が深まるだけでなく、2つの理論の対話による新たな知の創造が期待できる。説明研究には上記2つの理論および研究と実践をつなぐ橋渡しの役割があると捉え、フロアを交えた討論では教育心理学会における説明研究の重要性・将来性についても議論をおこないたい。

24-J-14 7月24日(日) 19:00~21:00 920会議室

### 動機づけ理論の再構築に向けて～現実からみた人の動機づけ研究の課題～

**企画者:** 中谷素之(名古屋大学)・速水敏彦(名古屋大学) **司会者:** 中谷素之(名古屋大学) **話題提供者:** 速水敏彦(名古屋大学) **討論者:** 伊藤崇達(京都教育大学)・伊田勝憲(北海道教育大学)・青木直子(藤女子大学)・岡田 涼(名古屋大学)

#### 【企画趣旨】

教育・発達における動機づけ理論にはさまざまなものがあり、近年では達成目標研究や自己決定理論等多くの研究が蓄積されてきた。しかしこれらの研究や理論は、人が生きる複雑な現実生活をどの程度反映し、説明しているだろうか。本企画では、従来の動機づけ研究が見落としがちだった、課題や学習以外の、人が生きる日常の生活において機能する動機づけの重要性や役割について論を提起する。それについて討論者から、各動機づけ理論や研究の立場から議論し、広くこれからの動機づけ研究の再構築に向けた問題提起を行う。

## 自主企画 第2日目 7月25日(月)

25-J-01 7月25日(月) 19:00~21:00 大会議室

### 質的研究の理論的サンプリングにおける理論的飽和度

**企画者:** 豊田秀樹 (早稲田大学) **司会者:** 秋田喜代美 (東京大学) **講演者:** 豊田秀樹 (早稲田大学) **指定討論者:** 無藤 隆 (白梅女子大学)

#### 【企画趣旨】

記述的なデータを使って、量的なものに還元しにくい言語的・概念的分析を行う質的研究 (qualitative research) は、心理学を初めとして、これまで科学的なアプローチを重視してきた様々な学問分野で認知され、近年、注目を集めるようになってきた。2004年には質的心理学会が設立され、その発展が期待されている (秋田、能智、2007)。

量的研究が統計的サンプリングを利用するのに対して、質的研究ではその研究の過程において理論的サンプリング (theoretical sampling) を重視する。理論的サンプリングを、グレイザー・スト劳斯 (1996) は“理論を産出するために行うデータ収集のプロセス”と定義する。理論的サンプリングはリサーチの開始時点でサンプル数を予めはっきり決めておくことは難しい。

理論的サンプリングでは、研究テーマに関して、文献・面接・取材・自由記述などの様々な媒体、あるいは単一の媒体からカテゴリーを抽出しカードなどの記録媒体に蓄積し、カテゴリーのサンプリングを続けると、ある時点で、研究テーマに直結した新しいカテゴリーに出会わなくなる (たとえば面接しても、新しい話があまりでなくなる)。この状態が近似的な理論的飽和である。

能智 (2004) は、“理論的飽和に達するまで、つまり、理論やモデルが形をなし、それを使えば新たなデータも説明ないし了解が可能になるまで、サンプリングは続けられることになる。もっとも「飽和」の判断はそれほど簡単ではなく、実際には、できあがったモデルの説得力や整合性などの基準をみたした時点で、サンプリングが終了されることが多い。その基準については質的研究の評価方法とも関わってくるだろう”と述べている。

しかし現状では、質的研究の評価にとって重要な理論的飽和は、主観的判断に依存している。このため、いつまでも新しい概念が登場しないのに理論的サンプリングを続ける用心深い (あるいは無駄なエネルギーを費やしている) 研究者がいる一方で、いくつかの資料に新しい知見が登場しなくなったことを根拠にさっさと理論的サンプリングを打ち切る杜撰な (あるいは効率のよい) 研究者もいるだろう。頼りになるのは研究者の個人的実感だけであり、研究者間で比較しにくい。さらに困ったことは、査読者や読者は、理論的飽和程度に関する実感すら得られないので、実質的に研究の評価に利用しづらいということが挙げられる。理論的サンプリングを打ち切った時点における、理論的飽和度の推定値が示されれば、質的研究の評価にとって有用な判断材料となることが期待される。

25-J-02 7月25日(月) 16:00~18:00 1040会議室

### 学校適応はどのようにとらえられるのか (3) —教育実践を通して見えてくる学校適応—

**企画者:** 大久保智生 (香川大学)・半澤礼之 (京都大学) **司会者:** 半澤礼之 (京都大学) **話題提供者:** 小泉令三 (福岡教育大学)・澤邊 潤 (新潟大学)・江村早紀 (神戸市立北須磨小学校) **指定討論者:** 鹿毛雅治 (慶應大学)・東海林麗香 (山梨大学)

### 【企画趣旨】

近年、様々な学校適応に関する問題、例えば小学校では学級崩壊、中学校では不登校や校内暴力、高校・大学では留年や中途退学などが大きく取り上げられるようになってきている。こうした学校適応に関する問題を理解・援助する際には、学校という文脈における適応という概念について再検討する必要があるだろう。

これまで、学校段階ごとの特徴（大久保・半澤，2009）や適応理論間の対話（半澤・大久保，2010）から学校適応はどのようにとらえられるのかについて考えてきたが、今回のシンポジウムでは、教育実践を通して見えてくる学校適応について考えてみたい。学校適応をどのようにとらえるかは自身の実践の仕方や実践観と深く結びついていると考えられる。したがって、教育実践に関わっている研究者に、各々の教育実践と教育実践を通して見えてくる学校適応について論じていただき、自らの実践の中では何が見えて何が見えなくなるのかなどを議論していきたい。

25-J-02 エクストラ 7月25日（月） 19：00～21：00 820 研修室

### 電子教科書は学校教育にどのように貢献するのか—情報アクセシビリティの観点から—

**企画・司会者：**高橋麻衣子（東京大学） **話題提供者：**高橋麻衣子（東京大学）・平林ルミ（日本学術振興会／東京学芸大学）・近藤武夫#（東京大学） **指定討論者：**中邑賢龍#（東京大学）・犬塚美輪（大正大学）

### 【企画趣旨】

近年、電子化された書籍を読むための電子端末が数多く開発され市場に出回るようになった。教育現場においても、電子化した教科書の効果的な導入・使用方法が模索され始めている。教科書を電子化することで教育はどのように変化するのだろうか。本シンポジウムでは、情報にアクセスする機会を増やすという観点から、ユニバーサルにデザインされた電子教科書の可能性と問題点について議論を行う。

通常学級に在籍していながらも特別な支援を有すると考えられる発達障害児は、知覚・認知の特性から紙の教科書だけでは学習が難しいことが多い。電子化されたテキスト情報は、何らかの電子ソフトと併用することで音声情報として提示したり、文字を拡大したり行間を広げたりコントラストを調整することが可能となる。このように、教科書を電子化することによって、情報にアクセスする手段が増え、紙の教科書だけでは学習が難しかった児童・生徒が学習に参加できる可能性が広がると考えられる。

本シンポジウムでは、情報にアクセシブルな電子教科書を利用した授業実践や、同様の機器を使った学習事例について報告し、障害をもつ学習者の学習を成立させる環境について欧米での現状を紹介しながら議論する。その後、指定討論者の意見をうかがいながら、障害の有無を問わずに電子教科書を利用することで新たに獲得される能力や失われる学習機会、児童の発達段階に応じた電子教科書利用の効果、そして“教科書”を使用した学習の本質などについて広く議論を行いたい。

25-J-03 7月25日（月） 16：00～18：00 710 会議室

### 一般社団法人 臨床発達心理士認定運営機構資格認定委員会企画 「臨床発達心理士」資格取得説明会・相談室

**企画者：**一般社団法人 臨床発達心理士認定運営機構資格認定委員会

25-J-04 7月25日(月) 19:00~21:00 710会議室

## 日本臨床発達心理士会企画シンポジウム

### 思春期・青年期のスクールソーシャルワークとその周辺

**企画・司会者**：滝澤真毅（日本臨床発達心理士会／帯広大谷短期大学） **話題提供者**：日置真世#（札幌市スクールソーシャルワーカー）・龍島秀広（北海道教育大学教職大学院）・坂本佳代子#（日本臨床発達心理士会／坂本福祉相談事務所）

#### 【企画趣旨】

いじめ、不登校、暴力、非行といった問題に直面する教育関係者の多くは、それらの行動が児童生徒本人の個人的な心のありようだけに帰される問題ではないことを痛感する。これらの問題の解決を目指そうとするなら、その背景にある、家庭、学校、友人、地域社会など、児童生徒の生育を取り巻く環境の複雑な影響にも目を向けなければいけない。児童虐待などはその典型であり、学校や教育といった枠組の中だけではとらえきれないものが、そこには存在している。

しかし、そのような枠組みを超えた横断的な発達支援の取り組みを実効あるものとして展開するためには、関連する分野において支援に携わる人との結びつきを持ち、その結びつきを資源として活用できるような人の存在が鍵となる。とくに現在学校で注目されているのが、スクールソーシャルワーカーである。

文部科学省は、2008年度に「スクールソーシャルワーカー活用事業」として公立小中学校へのソーシャルワーカーの配置に取り組み始めた。児童生徒の抱える問題を解決するために、情報の収集と共有、関係者や関係機関との調整をおこなって情報の収集と共有をはかることが、スクールソーシャルワーカーに期待される役割とされている。そこでは、必然的に、児童生徒を取り巻く教育、福祉、医療、司法など、多様な分野で仕事をする人々の視点が交錯することになる。しかし、まだスクールソーシャルワーカーの存在やその仕事について広く知られる状況になっていないと言いがたい。

本シンポジウムは、発達の支援、とくに思春期、青年期の人々を対象とした支援において必要なスクールソーシャルワーク的な視点とはどのようなものかということをしつこく炙り出せばという意図のもとに企画したものである。そのような支援の場面で必要となる複眼的な視点、異なる立場や職種の人々による協同的活動などについて実際的な経験をお持ちの方々に、話題の提供をお願いした。

25-J-05 7月25日(月) 19:00~21:00 1040会議室

### 新版K式発達検査：検査項目の意味を考える

**企画者**：片岡基明（京都女子大学短期大学部）・磯部美也子#（大阪体育大学健康福祉学部） **話題提供者**：片岡基明（京都女子大学短期大学部）・磯部美也子#（大阪体育大学健康福祉学部）・長谷部みさ（滋賀県中央子ども家庭相談センター） **指定討論者**：高井弘弥（武庫川女子大学）・大島 剛#（神戸親和女子大学）

#### 【企画趣旨】

新版K式発達検査は、健診後の精密検査や発達相談で一般的に使用されるようになっている。就学前教育の場においても特別支援教育が敷衍され、これまでよりもこの検査が行われる機会が多くなっているものと思われる。

検査の各項目が子どものどのような力を測定しているのかを理解した上で検査結果を解釈し、さらに、そこから

読み取れたことを日常の子どもの姿とどのように結びつけ、課題のある子どもの支援へとつなげるかまで考えられるようになるためには、臨床的経験と発達心理学的視点が欠かせない。これはどの心理検査でも必要なことであるが、とりわけK式発達検査は子どもの反応の自由度が高く豊かな解釈が行えるのだが、その分、技量を要する検査でもある。

また、検査での子どもの様子、その多様性を観察していると、課題遂行に現れる子どもの発達の流れについて、あれこれ思いをめぐらせることも少なくない。この子のこの反応はいったいどういう意味があるのか、あるいはこの課題はこういう発達の力をも前提として要求しているのではないかなど。

このラウンドテーブルでは特別支援教育が広まってきているこの時期に、新版K式発達検査の項目個々での反応について、その多様性と読み取りをあらためて検討するとともに、臨床や発達研究に活かすための視点や活用について討議したいと考えている。

25-J-06 7月25日(月) 19:00~21:00 1030 会議室

## 仮想的有能感のあれからとこれから

**企画者:** 速水敏彦 (名古屋大学)・小平英志 (日本福祉大学) **司会者:** 速水敏彦 (名古屋大学) **話題提供者:** 岡田 涼 (名古屋大学)・高木邦子 (静岡文化芸術大学)・松本麻友子 (南山大学)・小平英志 (日本福祉大学) **指定討論者:** 佐藤有耕 (筑波大学)・小泉令三 (福岡教育大学)

### 【企画趣旨】

仮想的有能感とは「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価・軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚」(速水・木野・高木, 2004)と定義される。現代人における心性を捉える概念として提唱されてから、今年ではほぼ10年が経過しようとしている。2003年の日本教育心理学会において、“「仮想的有能感」をめぐって”と題した自主シンポジウムが開かれて以降、数多くの実証的検証が行われてきた。しかし、これまでは各研究者の専門や関心の違いによって実に様々な検討がなされており、仮想的有能感研究における共通の課題や今後の展開について、公の場で議論されることはなかった。本企画では、ある程度知見が蓄積された現時点で、仮想的有能感のこれまでの研究成果を一度整理し、今後の研究の方向性や課題について、研究者間で共通認識を得ることをねらいとしたい。

25-J-07 7月25日(月) 19:00~21:00 730 研修室

## 保育者の「言葉かけ研究」の意義と課題 — “幼児の育ち” への貢献を問う—

**企画者:** 若山育代 (富山大学)・若林紀乃 (広島文化学園大学) **司会者:** 若林紀乃 (広島文化学園大学) **話題提供者:** 浅川淳司 (広島大学院教育学研究科/学術振興会特別研究員)・田中浩司 (福山市立大学)・吉永早苗 (ノートルダム清心女子大学)・若山育代 (富山大学) **指定討論者:** 清水益治 (帝塚山大学)

### 【企画趣旨】

これまで、多くの保育者や研究者が、保育者が乳幼児に対して行なう言葉かけの重要性を述べ、研究対象としてきた。たとえば、保育者が保育時間中に行なう言葉かけを類型化してパターンを見出したり、保育者の言葉かけが子どもの行動に及ぼす影響を明らかにしたりするなどである。こうした研究の積み重ねにより、これまで、幼児の

認知、社会、感情、感性等の様々な発達を促す保育者の言葉かけの特徴が示されてきた。

ところで、これまでの保育者の言葉かけに関する研究は、幼児の遊びの種類が異なれば、それに応じて異なる分野や背景のもとで議論されることが多かった。たとえば、造形活動中の保育者の言葉かけは造形教育に関する分野で議論され、ごっこ遊び中の保育者の言葉かけはごっこ遊びの研究に関する分野で議論されるなどである。そのためこれまでは、「言葉かけ研究」という枠組みの中で、保育者が行なう言葉かけはなぜ重要なのか、また、「言葉かけ研究」はどの方向に向かって積み重ねられていくものなのかが議論されることはほとんどなかった。

このような状況にあることから、現在は、「言葉かけ研究」の枠組みに関する共通理解はほとんど得られていない。しかし、こうした共通理解を得ることができれば、保育者が行なう言葉かけはなぜ重要なのか、また、これから「言葉かけ研究」がどこへ向かって進むべきかが見えてくると思われる。

そこで本シンポジウムでは、保育者の言葉かけの影響が強く現れる、ルールのある遊び、音楽遊び、造形遊びを取り上げる。そして、それぞれの観点から、保育者が行なう言葉かけがその遊びの場面でどのような役割を担っているのかについて話題提供をする。加えて、保育者と子どもの、明示的な言葉かけを介さないコミュニケーションに焦点を当てた話題提供も行う。これらの話題提供を通して、「言葉かけ研究」の意義と課題を明確にしたい。

25-J-08 7月25日(月) 19:00~21:00 720 研修室

## 我が子の子育てに悩む保育者たち

**企画者：**水野智美（筑波大学）・徳田克己（筑波大学） **司会者：**西館有沙（富山大学） **話題提供者：**徳田克己（筑波大学）・西村実穂（東洋大学）・水野智美（筑波大学）・大越和美（愛友幼稚園）

### 【企画趣旨】

「保育者は幼児期の子育てのプロである」と思っている人は多く、それは夫や祖父母、親戚にも及ぶことが少なくない。それゆえに保育者は大きなプレッシャーを感じながら我が子の子育てをしている。保育者はそのプレッシャーのもと、我が子に「良い子」であることを強いてしまったり、我が子の抱える問題を身近な人や子どもの担任保育者・教師に相談できなかつたりする。また、勉強や運動のできる子どもを仕事上で多く見てきていることから、我が子をその子どもたちと比較してしまい、「なぜできないのか」と子どもを責めたり、落ち込んでしまったりすることがある。このような状況があるために、発達臨床相談の窓口に我が子の子育てについて悩みを打ち明けに来る保育者が多い。

そこで本シンポジウムでは、幼児を持つ保育者が子育てに関してどのような悩みを抱えているのかを発達臨床相談の立場から報告するとともに、子どもを持つ保育者を対象に調査した結果を紹介したい。また、保育者である母親に育てられた子どもの立場から、どのようなメリットとデメリットがあると感じているのかについて紹介し、さらに保育者の立場から、園児の保護者が保育者であった場合にお互いにどのようなやりにくさがあるのかなどの話題を提供したい。

これらの話題提供をもとに、保育者がプレッシャーを感じることなく我が子の子育てするためには保育者はどのような心構えを持てばいいのか、また保育者に対する子育て支援をどのように進めればいいのかについて方向性を示していきたい。

25-J-09 7月25日(月) 19:00~21:00 特別会議室

## 心理統計教育におけるウェブの活用

**企画者：**山田剛史（岡山大学）・村井潤一郎（文京学院大学）・杉澤武俊（新潟大学）・寺尾 敦（青山学院大学）  
**司会者：**村井潤一郎（文京学院大学） **話題提供者：**寺尾 敦（青山学院大学）・高橋知音（信州大学）・杉澤武俊（新潟大学） **指定討論者：**池田 央（教育測定研究所）

### 【企画趣旨】

心理学を専攻する課程では、ほとんど全ての大学で心理統計の授業が用意されている。しかし、心理統計は、心理学を専攻する文系学生の大多数から「苦手」と見なされる授業である。そして心理統計の授業を担当する教員の多くが、どうやったら学生に統計を理解させられるか、あるいは、どのように授業を進めていけばよいか、などに日々苦勞していると思われる。

それでは、実際に、大学の文系学部において心理統計教育がどのように実践されているのだろうか。本シンポジウムでは、心理統計教育に携わる研究者・教員が自身の教育実践に関する話題提供を行い、シンポジウム参加者の間で実践知を共有できたらと考えている。

近年、様々な教育場面でウェブが活用されている。それでは、心理統計教育にどのようにウェブを活用できるだろうか。教材としての側面と評価としての側面について、その実践例を取り上げる。具体的には、①スマートフォンを利用した統計教育実践、②ウェブを活用した統計教育のためのe-learningシステム、③様々なテスト項目をウェブ上で閲覧可能な、統計テスト項目データベース、を話題提供として予定している。

上記の話題提供に対して、わが国における心理統計研究、テスト研究の第一人者である指定討論者がコメントする。その後、フロアとの意見交換を通じて、心理統計教育とその実践に関する議論を深めていきたい。ウェブの活用という視点から統計教育実践のあり方を考えてみたい。

## 自主企画 第3日目 7月26日（火）

26-J-01 7月26日（火） 16:00~18:00 820 研修室

### 若年層教員のキャリアモチベーションを形成しているものは何か

**企画者：**小泉令三（福岡教育大学）・西山久子（福岡教育大学） **話題提供者：**森 保之#（福岡教育大学）・谷 友雄#（福岡教育大学）・納富恵子#（福岡教育大学）・荒尾真一（岡山大学教師教育開発センター）・迫田裕子（福岡教育大学）・柴田悦子（福岡市教育センター）・高瀬竜一#（那珂川町立岩戸小学校） **指定討論者：**松木健一（福井大学）

### 【企画趣旨】

学校現場において、教員の年齢不均衡がもたらす指導体制の脆弱化や教員の職階構造の変容及び急速に変容する学校内外の関係者への対応・適応の困難さのため、若年層教員の離職傾向は続いている。それゆえ養成段階から若年層教員のモチベーションを高めるための方略を検討することは急務の課題である。そこで本企画においては、若年層教員への支援を行う立場にある話題提供者から、活動の報告を受け、若年層教員のキャリアモチベーションを形成しているものについて明確化し、より適切な教育と援助を行うための資料とする。

話題提供者とその報告内容は、①現職の中堅教員による、教職大学院の学部新卒院生へのメンタリング経験、②

メンタリング実施者の新人院生支援のためのパーソナリティ理解, ③若年層教員へのコーチングの成果, ④教科教育の力量向上支援から得られた成果の報告を受ける。その後, 指定討論者の問題提起を受けキャリアモチベーションの形成につながる要因について討議する。

26-J-02 7月26日(火) 16:00~18:00 710会議室

## 協同学習の質を高めるには何が必要か

### —深い理解に至らない原因とその対処法を考える—

**企画者:** 植阪友理 (東京大学)・瀬尾美紀子 (相模女子大学) **話題提供者:** 植阪友理 (東京大学)・瀬尾美紀子 (相模女子大学)・小林寛子 (日本学術振興会/早稲田大学) **指定討論者:** 三宮真智子 (大阪大学)・篠ヶ谷圭太 (慶応義塾大学)

#### 【企画趣旨】

授業や学習を効果的に進める方法の1つとして, グループ学習に代表されるような協同学習が盛んに取り入れられている。また, 教育心理学の分野においても, 協同学習の効果を示す研究知見が数多く報告されている。しかし, 実際の教育場面では, 協同学習の効果が得られるのだろうかという疑問を感じるケースも見られる。たとえば, 子どもどうして話し合う機会は設けられているものの, 活発なコミュニケーションがほとんど行われなかったり, 活発ではあるが各自の理解が深まるようなやり取りにはなっていない, などである。協同学習を教育活動の中に取り入れる際には, 協同で学習する機会を設定するだけでなく, こうした問題の背景にある要因について知った上で, 協同学習の質を高める何らかの工夫をする必要があるだろう。

本シンポジウムでは, 上で述べたような協同学習が必ずしもうまくいかない問題の背景要因について, 各話題提供者が独自の視点から迫る。具体的に, 植阪は「学習者の信念」, 小林は「学習者の知識やスキル」に着目した話題提供を行う。また瀬尾は, 協同学習のあり方について, 「学業的援助要請研究の知見」から示唆されるいくつかの論点について発表する。さらに, 各話題提供者は協同学習の質を高めるためには, 具体的にどのような工夫や指導が必要と考えられるか, それぞれの立場から述べる。これらの話題提供を受けて, 指定討論の先生には, 研究と実践の両方の側面からコメントをいただく。そして, フロアを交えて, 協同学習の質を高めるために必要な指導や支援についての議論を深めたい。

なお, 「協同学習」が取り入れられる学習場面には, たとえば, 総合的学習の時間に行われるような「探究的な学習場面での協同」や, 概念を獲得したり問題を解決したりする中で行われる「習得的な学習場面での協同」などが考えられるが, 本シンポジウムでは後者を中心的に取り上げることを断っておきたい。

26-J-03 7月26日(火) 16:00~18:00 1040会議室

## 授業を見る、語る、研究する(3) —小学校4年生社会科『玉川上水』の授業を例にして—

**企画・司会者:** 河野義章 (東京学芸大学名誉教授) **話題提供者:** 宮内 健 (立川市立第七小学校)・町 岳 (大田区立東調布第一小学校)・内山 隆# (札幌国際大学短期大学部) **指定討論者:** 梶井芳明 (東京学芸大学)・河野義章 (東京学芸大学名誉教授)

#### 【企画趣旨】

1つの授業が行われると、さまざまな立場から、さまざまな視点で、語るができる。研究授業のあとの協議会でも、教育心理学の研究者が教育実践と基礎研究のつながりを志向するときにも、実に多様な切り口があることを知らされる。そこで、私たち「授業をみる、語る、研究する会」では、5つの視点を設けた。これによって、「あなたは授業の何を研究しようとしているのですか」という間に答えることができると考えたからである。

しかし、授業をみたり、語ったり、研究したりしようとする誰もが、通奏低音のように心に秘めているのは、子どもたちの学びを確かなものにしたという願いではないだろうか。第50回総会での実行委員会企画から始まったこのシンポジウムも3回目である。前回同様に小学校の社会科の授業をとりあげる。算数や理科と違い、学びの実態を捉えるのがむずかしい。あらためて、「社会科における学びとは何か」、を問いたい。

26-J-04 7月26日(火) 16:00~18:00 1030会議室

### 児童のつまずきを大切に教科書学習の支援 ―支援の本質的な困難性とは何か?―

**企画者:** 山本博樹 (立命館大学) **司会者:** 荷方邦夫 (金沢美術工芸大学) **話題提供者:** 小野瀬雅人 (鳴門教育大学)・犬塚美輪 (大正大学)・山本博樹 (立命館大学) **指定討論者:** 水野治久 (大阪教育大学)・高垣マユミ (実践女子大学)

#### 【企画趣旨】

注目を集めている支援モデルと称する教授法は、被支援者(今回は児童)を「最後の審判」と戴いた上で、彼らが行う目的達成を手助けすることに力点を置く(例えば、茨城県教育研修センター, 2000; 小野瀬, 2010; 山本, 2010)。この支援では、児童のつまずきから導出した支援ニーズに基づいて支援することが有力なロジックとなる。ただし、つまずいても支援ニーズの表明し難い児童が存在するという事実が示唆するように、実は支援ニーズの「くみ取り」は重要である。ただ、この「くみ取る」という行為は、支援者の認識が関わる以上、「捏造」と表裏の関係にあることは言うまでもない。

そこで、児童のつまずきに立ち返り、これを支援の始発点とする考え方が重要になる。これは「つまずきを大切に」という考え方(東井, 1979)と通底するように思われる。しかし問題は深化していく。いくらつまずきを始発点としたとは言っても、上述の「捏造」問題を本質的には排除できないからである。これは、「『つまずいているように見えない子』が実はつまずいていた」という授業中の現実を想起すれば納得頂けるだろう。支援モデルで「最後の審判」に対する捏造は「大罪」にあたるという。ならば、「つまずきを大切に」という思いを抱いた支援者が「大罪」を犯すことのないように、乗り越えるべき困難性を承知しておくべきであろう。

今回のシンポでは、このような支援の本質的な困難性を検討したい。検討は以下の3つ観点から進める。第1は、児童のつまずきを発見するアセスメントの困難性である。第2は、発見した児童のつまずきを実際の支援につなげる際の困難性である。第3は、つまずいた児童に有効な支援を提供する際の困難性である。上記3点から検討するにあたり、教授学習研究において古典とも言うべき教科書学習(テキスト学習)を事例にとり検討したい。

26-J-05 7月26日(火) 16:00~18:00 730研修室

### 実践のアンサンブルをどう読み解くか: 状況論・活動理論の実際(1)

**企画者:** 青山征彦 (駿河台大学)・香川秀太 (大正大学) **話題提供者:** 青山征彦 (駿河台大学)・伊藤 崇 (北海道大学)・新原将義 (横浜国立大学)・有元典文 (横浜国立大学)・森下 覚 (大分大学) **司会・指定討論者:** 香

川秀太（大正大学）

### 【企画趣旨】

状況論的アプローチは、従来の心理学のように認知や行為を個人の能力や特性として分析するのではなく、社会的な相互行為として分析することを主張する。その源流の一つでもある活動理論では、人間の行為、活動を歴史的、かつ社会的なものとして考える。

こうした立場からは、社会的な実践は、さまざまな参加者とリソースが織りなすアンサンブルと言える。状況論的アプローチ、あるいは活動理論の立場から、実践のアンサンブルを読み解いた研究は、国内外で数多く蓄積されているが、教育心理学会の会員に広く知られているとは言い難い。

そこで、本シンポジウムでは、音楽練習、保育、教育実習といった、具体的な実践の場面を採り上げて、状況論的アプローチや活動理論から、実践のダイナミクスと複雑さをどのように読み解くことができるのか、さらには実践をどのようにデザイン・改善していくことができるのかを考えてみたい。この分野に明るくない会員にもわかるように概説的な紹介を加えつつ、教育や学習の研究において状況論的アプローチ、活動理論が持つ意義を再確認したい。

26-J-06 7月26日（火） 16:00~18:00 720 研修室

## 教育活動における情動処理能力の貢献

### 記憶と思考の基礎研究と生活場面における利用可能性

**企画・司会者：**豊田弘司（奈良教育大学） **話題提供者：**豊田弘司（奈良教育大学）・山本晃輔（奈良教育大学）・沖林洋平（山口大学教育学部）・山田洋平（福岡教育大学） **指定討論者：**谷口 篤（名古屋学院大学）

### 【企画趣旨】

Goleman（1995）による情動知能（EI）の重要性が叫ばれて久しいが、日本では、EIの研究が必ずしも活発になされているとはいえない。特に、教育現場における貢献においては、SEL（社会性と情動の学習）の実践研究はあるが、基礎研究からの示唆をどのように教育現場の教育活動に生かすのかという課題は未解決である。企画者は、日教心第48回大会以降、基礎研究が教育実践とどのような関わりが可能なのか、について議論を重ねてきた。本企画では、EIにおける情動の制御と調節の能力を中心に、記憶と思考における基礎研究及び実践研究例を紹介する。本シンポジウムを通して、情動処理能力が教育活動に重要な役割を持つことと、児童・生徒の教育活動への利用可能性を提案していきたい。

26-J-07 7月26日（火） 16:00~18:00 特別会議室

## 授業を意味づける（4）—協働の学びの質を問う—

**企画・司会・話題提供者：**鹿毛雅治（慶應義塾大学） **企画・話題提供者：**秋田喜代美（東京大学）・高橋知己（岩手県滝沢村篠木小学校） **話題提供者：**牧田秀昭#（福井県教育研究所）・藤村宣之（東京大学）・守屋 淳（兵庫県立大学）

### 【企画趣旨】

本学会総会でこれまで3回にわたり「授業を意味づける」というタイトルの自主シンポジウムを連続で企画し、シンポジウム会場で参会者と登壇者が授業のビデオと一緒に参観した後に、授業者と研究者の対話を中心とした討論を実施してきた。その4回目になる今回も、授業者と研究者の授業の意味づけをめぐる対話をこれまでと同様の形態で実施するが、今回は、とりわけ協働的な学習活動における学びの成立とその質に焦点を当て、中学校数学科の実践をめぐる検討を行う。

活発なグループ学習のプロセスでは「協働から個へ」という方向と「個から協働へ」という方向の双方のダイナミズムが生起していると考えられる。そのようなダイナミズムの中で成立している学びをいかに見取っていくか、そしてその学びの質をどのように判断するかという点などについて、実際の授業記録（映像、トランスクリプト）をもとにしながら、授業者自身の意図や省察を聴くことを通して、授業実践に関する認識を参会者とともに深めていきたい。

26-J-08 7月26日(火) 16:00~18:00 1050会議室

## 国際化社会における教育心理学と教育支援

**企画者:** 佐野秀樹 (東京学芸大学)・鈴木一代 (埼玉学園大学) **司会者:** 佐野秀樹 (東京学芸大学) **話題提供者:** 蒲原千尋 (杉並区適応指導教室)・高橋順子 (東久留米 Christian Academy in Japan)・小林 亮 (玉川大学教育学部)・田中美希# (清泉インターナショナルスクール) **指定討論者:** 松下美知子 (金沢大学)・稲田素子 (東京学芸大学国際教育センター)

### 【企画趣旨】

最近の世界は経済や環境、情報面での国際化が進み、日本も世界の中で他の国々とのような関係を持つか迫られている。教育でも国際化は進行しつつあり、わが国では様々な課題が存在している。

これまで、わが国でも海外帰国生徒が日本社会へ適応することの困難さ (カウンターカルチャショック)、国際結婚の子どものアイデンティティの問題 (アジアからの花嫁の適応問題)、大学における留学生教育、ニューカマーと呼ばれる海外からの最近の移住者 (労働者) などの研究が行われてきた。

最近では、さらに国境を越えた情報の流れが瞬時に起こるインターネットに関する教育、日本語を母国としない外国人児童・青年の教育、日本人のバイリンガル (外国語) 教育、多文化アイデンティティ (例 サードカルチャーキッズ) の研究、NPO などの海外での活動 (海外での教育援助) などが付け加わり、国際化についての教育・研究は、日本の教育を発展させる一要因となっている。

本シンポジウムでは、文化間の接触・移動や新しい IT 機器などを通じた情報の流れによる相互的な影響を積極的に捉え、新しく教育心理学を展開していくために、国際化社会における教育心理学のあり方と多文化状況で生きる子どもや若者の心理や教育援助のあり方について検討する。

話題提供者は、インターナショナルスクールのカウンセラー、留学生のアイデンティティ研究者、海外体験のもたらす衝撃の研究者などがあつまり、教育心理学に関連した国際化の現状と今後の課題について話し合う。

26-J-09 7月26日(火) 16:00~18:00 510会議室

## ことばの力の育成・発達支援

**企画者:** 森 敏昭 (広島大学)・村井潤一郎 (文京学院大学)・白川佳子 (鎌倉女子大学)・深谷優子 (東北大学)

**司会者：**白川佳子（鎌倉女子大学） **話題提供者：**高橋 登（大阪教育大学）・小松孝至（大阪教育大学） **指定  
討論者：**村井潤一郎（文京学院大学）・森 敏昭（広島大学）

### 【企画趣旨】

近年、日本において、読解力の低下と、その改善のための対策の必要性が指摘されている。文化庁が2001年度に実施した「国語に関する世論調査」では、日本人の「書く力」が低下していると感じている人が88%、また「読む力」は69%、「話す力」は59%に上り、国語力低下に対する懸念が広がっている。さらに2004年末に公表されたOECD学習到達度調査（PISA）で論理的思考力を含む読解力の低下が明らかになったことを受け、文科省は「これからの時代に求められる読解力の養成には、教科の枠を超えた共通理解と取り組みが必要だ」とした。その対策として、従来文学的な文章の鑑賞に偏りがちでもあった「読解力」の定義を広げ、文章や資料、データを解釈し論理的に思考できる力を養成するため、国語だけでなくすべての教科や総合学習を活用していく方針を示している。このような背景のもと、「ことばの力」をいかに育成・支援できるのかは、教育界のみならず、社会からも期待が求められることであろう。

本シンポジウムでは、まず二名の発達研究者から、ご自身の研究をもとに話題提供をしていただく。それを受け、二名の指定討論者が、それぞれの視点からコメントを加える。さらに、フロアとの意見交換を通して、「ことばの力」の本質とは何か、いかに育成・支援できるのか、など、広く「ことばの力」の可能性について検討していきたい。

26-J-10 7月26日（火） 16:00~18:00 940 研修室

## 学校での心理的介入におけるニーズとアセスメントの対応

**企画者：**嶋田洋徳（早稲田大学人間科学学術院）・小関俊祐（愛知教育大学学校教育講座） **司会者：**小関真実（愛知教育大学教育臨床総合センター） **話題提供者：**高橋 史（信州大学教育学部）・水野智恵子（岐阜大学大学院教育学研究科）・林 響子（袖ヶ浦市立総合教育センター）・北爪直美（世田谷区適応指導教室）・小関俊祐（愛知教育大学学校教育講座） **指定討論者：**菅野 純（早稲田大学人間科学学術院）・嶋田洋徳（早稲田大学人間科学学術院）

### 【企画趣旨】

学校現場において、学校不適応の状態にある児童生徒に対する心理的な支援が求められている。特に近年は、いじめや不登校といった問題を抱えている児童生徒を対象とした対応だけではなく、すべての児童生徒を対象とした予防的意味合いの強い心理的介入が実践され、学校適応感や社会的スキルの向上などの効果を上げてきた。

しかしながら、心理的介入の様式が多様化する一方で、介入の手続きに重きが置かれ、学校現場における実際のニーズと、ニーズに応えるためのアセスメント、そしてアセスメントに基づく手続きの選択に乖離があるという指摘が少なくない。同様に、心理的介入の方法論としては、社会的スキル訓練や構成的グループエンカウンター、ストレスマネジメント教育など多岐に渡るものの、学校現場における心理社会的問題に対する具体的なアセスメント方法は十分に確立していないともいえる。

そこで本シンポジウムでは、学校現場において心理的介入を実践していく中で、学校側が心理的介入に期待するニーズをくみ取り、心理的介入の実践者が学校という大きな集団のどのような点に着目し、問題解決を図っているのかを紹介する中から、今後どのような形で学校現場における心理的介入を実践していくことが求められているか、またその際の留意点は何かを検討していく。

まず、話題提供者として高橋先生から、攻撃行動に対する問題解決スキル訓練を用いた実践についてご紹介いただき、問題解決スキルを理解する上での留意点と、具体的なアセスメント方法を選定する上での着眼点についてお話しください。次に水野先生からは、特にアセスメントの具体的な方法について、質問紙を用いた学級集団の状態像のアセスメントと、アセスメントに基づくストレスマネジメントの有効性についてお話しください。林先生からは、学級集団における児童間の相互作用に注目した集団のアセスメント教育の具体的な方法と、そのアセスメントに基づく学級集団を対象とした心理的介入の効果についてお話しください。北爪先生からは、適応指導教室における実践に基づき、学校現場におけるアセスメントの観点についてお話しください。また、小関からは、通常学級に在籍する発達障害をもつ児童と、同じ学級の児童との関係に着目したアセスメントおよび心理的介入の有効性についてお話しさせていただきます。これらを受けて、菅野先生、および嶋田から、学校現場における心理的介入の今後の課題について指定討論を行う。

26-J-11 7月26日(火) 16:00~18:00 1010会議室

## 日本人の心のイメージと心理学教育

**企画・話題提供者:** 橋本憲尚 (佛教大学教育学部) **話題提供者:** 嶋田博行 (神戸大学大学院)・芦高勇氣 (神戸大学大学院) **指定討論者:** 加藤義信 (愛知県立大学教育福祉学部)

### 【企画趣旨】

「〇〇心理学」と題する大学授業は多くの受講生を集めているにも関わらず、受講後の感想は「当たり前のことなのに理屈が多すぎる」「直感的に理解しづらい」などと不満をもらす声が多い。結局、学生は期末テストのためにテキストやノートの記述(用語説明や理論的な解説など)を丸暗記して終わっているように思われる。こうした状況が長年にわたって継続しているのは、外界との情報のやりとりのなかのmindの働きを捉えようとする欧米の心理学の枠組みが、「心」を気持ちとして直感的に捉える日本人には受け入れにくいことを反映しているように推察される。本企画は、学生が抱えている素朴イメージを確認するとともに、科学としての心理学の特質をふまえた教育実践のための基礎的な視点を提供することを目的とする。心理学教育の現状を打開して新たな展開を探るために、多くの学兄からのご意見を給りたい。

26-J-12 7月26日(火) 16:00~18:00 550会議室

## 大学生のレポートライティング教育の実践・研究の現状と課題(2)

**企画・司会者:** 鈴木宏昭 (青山学院大学) **話者提供者:** 阿部慶賀# (青山学院大学)・楠見 孝 (京都大学)・富田英司 (愛媛大学) **指定討論者:** 鈴木宏昭 (青山学院大学)

### 【企画趣旨】

大学教育改革においてレポートライティング力の育成はことのほか重要な課題とされている。多様な分野の研究者が、大学生のレポートライティング力の育成に関する研究を行うようになった。

教育心理学からこの問題にアプローチする1つの方法は、学習者の初期知識、素朴概念を把握することであろう。一般に学習の過程は、初期知識と新しい知識の統合過程と考えられる。だとすれば、学習者がレポートやその作成についてどのような考えを持っているのかを把握することは、レポートライティングの教育にとってきわめて重要

である。

もう1つのアプローチは、レポートライティングに関連する能力、技能を特定し、それをどう評価するか、またどう育成するかを検討するものである。レポートライティングには、批判的思考や議論の能力が深く関係していると考えられる。関連文献の批判的な読解を通じた問題設定、自己の論述に対するチェックや反省は批判的思考の働きのなしに行うことはできない。この意味で批判的思考はレポートライティングにおいて中核的な能力の1つである。同様に重要な能力の1つとして議論力が挙げられる。レポートにおける主張とは、それと対立する別の主張との間の議論を通して、読み手を説得する過程と考えることができる。こうしたことからすると、議論の力もまたライティングの中核的な能力の1つと考えることが出来よう。

そこで今回はレポートに対する学生の初期知識の把握、批判的思考や議論とライティングの関係についての研究を進めている研究者に報告をお願いした。これを通して教育心理学における、これからの研究課題を明確にすることを目指す。

26-J-13 7月26日(火) 16:00~18:00 920会議室

### 「FD研修 大学講義の改革—大教室での私語対策とBRD方式を中心に」

企画・講演者：宇田 光（南山大学） 司会者：市川千秋（皇學館大学）

#### 【企画趣旨】

大教室での講義を担当する教員は、私語等の問題に直面することがある。本研修企画では、この問題と対策を中心に考えていく。

想定される参加者・・・ 多人数授業に関心のある大学教員等、30名程度。特に、大学院に在籍しつつ非常勤で大学講義を担当するなど、適切な授業方法がわからずに困っておられる方を想定している。

（前半） 私語の発生・拡大する要因、多人数授業での方法論、BRD（当日ブリーフレポート方式）を中心に、小講演を行う。実際に用いられるBRD書式を配布し、必要な看板などの教材・教具も展示する。BRDの授業を、具体的にどのように進めるかを紹介する。

（後半） 多人数授業での大学講義のあり方について、参加者と意見交換したい。

26-J-14 7月26日(火) 19:00~21:00 大会議室

### 動機づけからとらえる授業研究のデザイン —教育心理学的アプローチから—

企画・司会者：高垣マユミ（実践女子大学） 話題提供者：高垣マユミ（実践女子大学）・中谷素之（名古屋大学）・伊藤崇達（京都教育大学） 指定討論者：鹿毛雅治（慶應義塾大学）・白水 始（中京大学）

#### 【企画趣旨】

ここ最近になって、教育界は大きな変化を遂げている。例えば、「学習指導要領の改訂」（文部科学省「新学習指導要領の完全実施に向けて」、2010）、「学習評価の基本的な考え方の見直し」（文部科学省「児童生徒の学習評価の在り方について」、2010）、「全国学力学習状況調査の実施」（文部科学省「平成23年度以降の全国的な学力調査の在り方について（中間まとめ）」、2010）等々にみられるように、さまざまな動きが出てきている。教育心理学研究は、こうした刻々と変化している教育界の方向性や問題の要請に敏感になり、生きた実践の場との交流を持ちなが

ら、貢献に寄与する新たな視点を提供していかなくてはならない。

中でも、学習指導要領の改訂という動きに伴って、今日の「授業研究」に対する、教育界から教育心理学界への要請はきわめて高いものになっている。授業とは、動的で複雑な営みであり、例えば、動機づけ、概念理解、協同学習、評価等といった様々な側面は、分断されて存在しているわけではなく相互に関連づけられながら営まれており、教育心理学の領域においては、こうした多様な側面が常に授業研究の対象となり得る。

近年のこうした現状に鑑み、今回は、特に授業研究における「動機づけの要因」に焦点を当て、以下の3つの教育心理学的アプローチから話題提供を行う。第1に、学習者の動機づけを高めながら概念変化を促進させる教授方略を、いかにモデル化できるか。第2に、人間関係に関わる学習の要因は、自ら学ぶ自己調整の方略をいかに促すことができるか。第3に、教室における社会的な目標や意欲は、学習達成をいかに高めることができるか。これら3点から検討するにあたって、近年の重要な動機づけ研究の理論的背景に依拠しつつ、実証的な事例についても紹介していく。

26-J-16 7月26日(火) 19:00~21:00 710会議室

### 認知カウンセリングからみた学習上の問題と基礎研究の展開

**企画者:** 藤澤伸介(跡見学園女子大学)・市川伸一(東京大学大学院) **司会者:** 市川伸一(東京大学大学院)  
**話題提供者:** 篠ヶ谷圭太(慶應義塾大学先導研究センター)・深谷達史(東京大学大学院教育学研究科)・鈴木雅之(東京大学大学院教育学研究科) **指定討論者:** 藤澤伸介(跡見学園女子大学)・床 勝信#(岡山市立灘崎中学校)

#### 【企画趣旨】

認知カウンセリングを継続していると、学習者の様々な問題点が明らかになる。認知カウンセラーがその知識を自己の経験として蓄積し、力量の向上をはかることも重要であるが、一方ではそれらの問題を一般化し、基礎研究として展開していくこともまた重要である。問題意識を共有し、研究によって知識を体系化・精緻化することで、教育全般に役立つ知見となるからである。

今回は、特に最近基礎研究としても纏まった成果が得られている(1) 予習の効果と個人差特性の関連、(2) 学習者自身の説明が理解に及ぼす効果、(3) 評価基準の提示によるテスト見直し行動の変容、の3点を取り上げ、教育現場の視点も加えながら、研究と実践の接点を探ることにする。

初等中等教育段階にある学習者の学習行動は、学校の授業を中心として展開することが多い。そこで、(1)の問題は授業の受け方の改善につながるし、(2)の問題は個人の単独学習や教師の指導法の改善に示唆を与える。また(3)の問題は、個人にとってはテストの活用法、教師にとっては評価方法を検討するのに役立つ研究となる。

シンポジウムでは、この3つの研究に関わる様々な意見交換を通じて、認知カウンセリングの重要性を再確認し、新たな研究の可能性や、研究成果の活用の可能性について考察を深めたい。

26-J-17 7月26日(火) 19:00~21:00 1040会議室

### 批判的思考態度尺度の基礎研究と教育実践への利用可能性

**企画者:** 沖林洋平(山口大学教育学部) **司会者:** 犬塚美輪(大正大学人間科学部) **話題提供者:** 沖林洋平(山口大学教育学部)・藤木大介#(梅光学院大学子ども学部)・平山るみ(大阪音楽大学) **指定討論者:** 楠見 孝(京都大学大学院教育学研究科)・田邊敏明(山口大学教育学部)

## 【企画趣旨】

批判的思考は、近年、高等教育や市民教育の文脈で重要だと考えられるようになった思考の機能のひとつである。批判的思考に関する研究は、教育心理学や教育学領域では、論文が発表されるようになってきている。また、認知心理学の専門書においても、章立てられるようになってきている。このような傾向は、批判的思考が思考の応用的機能を研究するにあたって現代的に重要であることを示唆するものであるといえるだろう。

批判的思考研究において最も多く用いられる定義としては、Ennisの「信じるべきことや行うべきことの決定に重点を置く、反省的、理性的思考」というものである。これは従来の研究で多く扱われてきた効率的な問題解決過程に適用される思考、例えば推論やヒューリスティック、あるいは、近年 Stanovich (2009) が指摘する自律的思考過程といった諸機能とは異なるアプローチである。また、最近では、批判的思考の態度の個人差(平山・楠見, 2004)やメタ認知としての批判的思考の個人内変動(田中・楠見, 2007)に関する研究も行われるようになった。さらに、目標や目的に応じた文章読解としての批判的読解(犬塚, 2010; 沖林, 2004)に対する効果的な教育的介入や、食品や環境に対するリスク認知(平山・楠見, 2009; 上市・楠見, 2009)のような教育や社会問題に対する批判的思考の応用研究も発表されるようになった。

このような批判的思考に関する研究において、現在わが国で最も多く利用されている尺度が批判的思考態度尺度(平山・楠見, 2004)である。批判的思考態度尺度は、批判的思考態度を構成する下位因子として、「論理的思考への自覚」、「探究心」、「証拠の重視」、「客観性」を設定し、質問項目数も18項目と利用しやすい尺度であり、開発者以外の研究者による応用研究も多い(例えば、藤木・沖林, 2008など)。このように、批判的思考態度尺度は、批判的思考研究に欠かせない測定ツールであるとなっている。本シンポジウムでは、批判的思考の基礎研究と教育実践に対して、批判的思考態度尺度の利用可能性を検討することにより、今後の批判的思考研究に対して、基礎研究や教育効果測定の新しい視点を提供することを目指す。

具体的には、批判的思考態度尺度を取り巻く問題について、複数の研究者による話題提供と指定討論をもとに議論を深めたいと考え、本ワークショップを企画した。話題提供の視点としては、批判的思考の測定尺度研究の成果(平山)、批判的思考態度と保育の視点の多様性(藤木)、批判的思考態度と合理性判断課題や社会的行動の関連(沖林)を予定する。また、話題提供に対する教育心理学の先端的研究に基づく指定討論(楠見, 小杉)を中心として議論を深めることを目指す。

26-J-18 7月26日(火) 19:00~21:00 1030会議室

## 保育者養成の今2 「保育の心理学」を創造する短期大学の挑戦

**企画・司会者:** 滝口圭子(三重大学)・田爪宏二(鹿児島国際大学) **話題提供者:** 中村 涼(安田女子短期大学)・白川佳子(鎌倉女子大学短期大学部)・西川由紀子(京都華頂大学) **指定討論者:** 田爪宏二(鹿児島国際大学)・松本博雄(香川大学)

## 【企画主旨】

保育・幼児教育に対する要請は多様化、複雑化の一途を辿っており、更には、現在、保育の場の枠組みそのものが組上に載せられ、多くの関係者がその動向を注視している。しかし、そうした動きの中にあっても、日々の保育の営みは続けられ、また保育職を目指す学生を前にした保育者養成校の努力も続けられている。

平成22(2010)年度の日本教育心理学会第52回総会において、「保育者養成の今: 心理学研究者が考えていること」と題する自主シンポジウムを開き、「短期大学での保育者養成のあり方(倉盛美穂子)」「保育者養成短明大

学における心理学の講義：授業改善のとりくみからみえてきたもの（田爪宏二）」「絵本研究と保育者養成をつなぐ：保育現場での研究結果を学生と共有する授業（横山真貴子）」という3件の話題提供及び討論を行った。昨年度のシンポジウムは、多様な保育者養成校における取り組みを紹介することができた点において意義深かったが、それぞれの場が抱える課題について掘り下げることは困難であった。そこで、本シンポジウムでは、短期大学における保育者養成に焦点を当て、更に平成23（2011）年度より実施される「保育の心理学」の洞察と創造を議論の中心に据えることとする。

平成21（2009）年度からの新・保育所保育指針の施行に伴い、「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」が改定され、全国の保育士養成校はカリキュラムや教科目の見直しを求められたが、中でも「発達心理学」（講義2単位）「教育心理学」（講義2単位）に替わる教科目としての「保育の心理学Ⅰ」（講義2単位）「保育の心理学Ⅱ」（演習1単位）の新設（松本，2011）は、保育者養成に関わる多くの心理学者を動揺させたといえよう。登壇者には、これまでの自身の現場を対象化しながら、正に今、創られようとしている「保育の心理学」について、いくらかでも言及し、また提言していただくよう依頼した。

26-J-19 7月26日（火） 19：00～21：00 730 研修室

### 学校の組織力向上に関する社会心理学的研究

**企画・司会者：**淵上克義（岡山大学） **話題提供者：**迫田裕子（福岡教育大学）・淵上克義（岡山大学）・坂本篤史（東京大学／日本学術振興会） **指定討論者：**神山貴弥（同志社大学）・吉山尚裕（大分県立芸術文化短期大学）

#### 【企画主旨】

近年、多様な諸問題を解決していくために、学校は組織的対応が求められている。これまで、組織的対応の必要性や教科学習、発達支援あるいは教育臨床などの個別的な対応のあり方については、多くの場において議論されてきたが、組織的対応の基礎となる組織としての学校の力量構造や機能については、ほとんど議論されてこなかった。

本シンポジウムでは、組織的対応の基礎となる教職員の社会的行動や教師集団について検討することによって、学校組織の力量向上のあり方について考えたい。まず、教師一人一人に焦点を当てて、教師の職能成長と教師力の関係について、福岡教育大学の迫田裕子先生に論じていただく。次に、組織対応の中核となるリーダーシップの問題に焦点を当てながら、学校組織力向上に関わるリーダーシップの特徴と役割について淵上から報告する。第三に、教師集団に注目し、教師集団の力量向上について同僚性の観点から東京大学の坂本篤史先生に発表してもらう。指定討論者には、学校社会心理学の立場から同志社大学の神山貴弥先生に、集団・組織心理学の立場から大分県立芸術文化短期大学の吉山尚裕先生にお願いする。

26-J-20 7月26日（火） 19：00～21：00 720 研修室

### 道徳性心理学と多文化共生

**企画者：**小林 亮（玉川大学）・大西文行（東京未来大学） **司会者：**小林 亮（玉川大学） **話題提供者：**鍾水浩#（弘前大学）・李 和貞（早稲田大学）・小林 亮（玉川大学） **指定討論者：**大西文行（東京未来大学）

#### 【企画趣旨】

外国人児童生徒の増加や文化間移動体験の日常化にともない、日本の学校現場でも「多文化共生」が大きな教育

課題として浮上してきている。しかし日本語指導をはじめとするさまざまな取り組みにも拘らず、外国人児童生徒や帰国児童生徒が学校現場で心理的疎外に苦しむ事例が多く報告されているのが現状である。多文化共生を妨げている大きな要因に、①道徳的価値判断をはじめとする文化的価値体系の食い違いに起因する葛藤、および②こうした道徳性に関する文化の多様性を変数として包み入れた形で仲間意識を醸成してゆこうとする多文化コミュニティー感覚の欠如ないし未発達があげられる。しかもこの2つの要因は相互に深く連関していると考えられる。そこで本シンポジウムでは、多文化共生という今日的な教育課題に日本の教育現場がどのように取り組んでいったらいいのかについて、道徳性心理学の立場から模索と提言を行いたいと考えている。教育関係者、留学生および児童生徒の道徳的価値意識の構造に焦点を当て、学校コミュニティーを形成する心理的基盤の分析を通じて、多文化共生を促進するような道徳性の発達条件と特徴を明らかにしてゆきたい。価値の対立を否定的に捉えるのではなく、価値多元的な学校文化の創生に向けた発達課題として受け止める視座が獲得されることを願っている。

26-J-21 7月26日(火) 19:00~21:00 特別会議室

## 教室での身体的なコミュニケーションからとらえる学び

**企画・話題提供・司会者:** 伊藤 崇 (北海道大学大学院教育学研究院) **企画・話題提供者:** 関根和生 (日本学術振興会/国立情報学研究所) **指定討論者:** 福田信一 (札幌市立幌北小学校)

### 【企画趣旨】

小学校の授業は、児童と教師間のコミュニケーションによって進行する。授業のコミュニケーションに関する先行研究の多くは、主としてその言語的側面に焦点を当ててきた。しかし、言語のみならず非言語的行動によってもコミュニケーションは行われる。したがって、授業中に児童が表出する身体的な表現に着目することは、授業の実際の展開を十全に理解する上できわめて重要である。

本シンポジウムは、以上の視点に基づき、児童や教師の身体的な表現に着目し、実際の授業風景を撮影した映像に基づいてコミュニケーションの動的な展開を多角的に検討する。具体的には、話題提供者の伊藤崇が、国語の授業における話し合い場面に関して、児童と教師による視線の動きを検討する。さらに、話題提供者の関根和生が、同じく国語の授業における児童の挙手行動を検討する。以上の検討を通して、児童がいかんして授業に参加しているのか、そこでどのような学びを経験しているかを明らかにしていきたい。

さらに、これらの分析結果に対して、児童のコミュニケーションに焦点化した研究に学校をあげて取り組まれている札幌市立幌北小学校から福田信一校長にお越しいただき、コメントをいただく。熟練した教育者としての目から再検討していただくことで、研究者には見えないポイントが浮かび上がってくるのが期待される。

なお本シンポジウムでは、実際の授業を撮影した映像をフロアの参加者とともに視聴しながら進行していく予定である。可能な限り具体的なデータを共有しながら議論を行うことは、教育者と研究者という視点の異なる二者が協同する場合には重要なことであろう。

26-J-22 7月26日(火) 19:00~21:00 1050 会議室

## 異なる文化における外国語学習動機を考える

—ウクライナ・メキシコ・中国の日本語学習者を例として—

**企画者:** 小林由子 (北海道大学大学院国際広報メディア/観光学院) **話題提供者:** 大西由美 (北海道大学大学院)

国際広報メディア／観光学院大学院生)・佐藤 梓 (北海道大学大学院国際広報メディア／観光学院大学院生)・阿部啓子 (北海道大学大学院国際広報メディア／観光学院大学院生)

### 【企画趣旨】

学習者の動機づけは、日本国外で外国語として日本語を学ぶ際、学習支援上の大きな課題となる。たとえば、必修科目として日本語を学ぶ学習者の学習意欲が次第に低減することや、日本語を学習しても実際に使う機会のない環境での学習意欲の維持は、多くの地域で問題点として指摘されている。また、近年インターネットの発達により日本語使用機会は増えつつあるが、教室を離れた場で、いかに学習者が自発的かつ継続的に日本語を使っていくかも課題と言える。

これらの課題は、日本国内での外国語学習にも共通するものであろう。

日本国外での日本語学習の特徴のひとつは、学習者がそれぞれ異なる文化的背景を持っているため、異なる社会的文脈の中での学習を考慮に入れざるをえないことである。日本語教育分野における先行研究では、国による動機づけ構造の差異を扱ったものが多い。また、学習者の学習動機の変化や学習者の動機づけを高める方策についても検討がなされている。

しかしながら、これらの研究は、教育心理学分野における動機づけ研究とそれほど連携がなされていないのが現状である。

そこで、本ラウンドテーブルは、日本国外で日本語を外国語として学ぶ学習者のケーススタディをもとに、異なる文化（社会的文脈）の中での外国語の学習動機・有能感・学習継続などについて検討し、主に動機づけの観点から外国語学習の支援のあり方を共に考えることを目的とする。

本ラウンドテーブルでケーススタディとして取り上げるのは、ウクライナ・メキシコ・中国である。これらの国々はそれぞれ日本語学習を取り巻く社会的文脈が異なっており、学習動機や有能感のありかたが異なる。たとえば、ウクライナにおいては従来の先行研究とは異なる動機づけ構造が見られ高学年と低学年ではその構造が異なること、メキシコにおいては有能感が総じて高いがそれが必ずしも学習意欲に結びつくとは限らないこと、中国においては従来外発的動機づけとされてきた「試験」が必ずしも外発的とはいえないことが明らかになりつつある。

これらの差違の検討は、異なる社会的文脈における外国語学習動機を考える上で新たな視点をもたらす可能性をもつ。また、日本という社会的文脈の中での外国語学習に対してもリフレクション可能であろう。

26-J-23 7月26日(火) 19:00~21:00 510会議室

### 「教育相談コーディネーター」の役割について考える

**企画者:** 中原美恵 (東洋大学)・田邊昭雄 (千葉県立船橋法典高等学校)・金山健一 (函館大学) **話題提供者:** 西山久子 (福岡教育大学大学院)・佐藤一也 (岩手県教育センター)・今西一仁 (高知県心の教育センター) **指定討論者:** 大野精一 (日本教育大学大学院)・中村 健 (プール学院大学)

### 【企画趣旨】

学校では、様々な問題・課題があり対応に苦慮している。教育相談の必要性が叫ばれてはいるが、必ずしも各学校に機能的に定着しているとは言い難い。そこで「教育相談コーディネーター」の役割について議論を深めたい。本企画では「教育相談コーディネーター」は、学校心理学の枠組みの1次支援~3次支援を、包括的・組織的にコーディネートする役割を持つ教員と位置づけている。具体的には、学校システムや教育課程に予防的・開発的な取組を位置付ける、チーム支援や関係機関との連携を推進するなど、学校教育の中核を担う役割である。

話題提供者からは、すでに「教育相談コーディネーター」を育成している、大学・行政・教育センターの三者から、研修内容、育成方法の成果と課題の説明を受ける。指定討論者の問題提起を受けて、「教育相談コーディネーター」の役割について、フロアを交えた討議を実施したい。

26-J-24 7月26日(火) 19:00~21:00 940 研修室

## 我が国における援助要請研究の新たな視点～理論の構築と効果的な実践を目指して～

**企画者：**飯田敏晴（独立行政法入国立国際医療研究センター）・木村真人（東洋学園大学）・永井 智（立正大学）

**話題提供者：**小池春妙（名古屋大学大学院）・後藤綾文（北名古屋市スクールカウンセラー）・成田絵吏（名古屋大学大学院） **指定討論者：**水野治久（大阪教育大学）

### 【企画趣旨】

個人が問題を抱え、それを自身の力では解決できない場合に、必要に応じて他者に援助を求めることは、重要な対処方略の一つである。しかしながら実際には、他者の援助を必要としながらも、誰にも援助を求めない者が少なからず存在する。例えば医療領域では、うつ病患者の内、実際に専門家を受診する者は4人に1人程度であることや、さらにその内4人に1人は治療からドロップアウトすることなどが報じられている(ファイザー株式会社, 2008)。また、学校臨床の領域でも、多くの悩みを抱えながらも、それを誰にも相談しない生徒が多く存在することがしばしば指摘される (e. g., 石隈・小野瀬, 1997 ; 永井・新井, 2005)。

このように他者に対して援助を要請する行為は、心理学においては援助要請行動と呼ばれる。援助要請行動は、医療領域だけでなく、学校領域、産業領域、子育て支援などの福祉領域など様々な領域で、その重要性が指摘されている。そしてわが国でも、援助要請行動についての研究が近年増加しており、一定の知見が蓄積されている (e. g., 木村・水野, 2008 ; 水野・山口・石隈, 2009)。

先にあげたような問題に対応するためには、援助要請を体系的に研究していくことと同時に、実際の支援の領域に応じた、個別の実践の蓄積が必要とされる。しかしながら現状においては、その研究内容、領域ともにいまだ限られているのが現状である。

本企画では、様々な領域で援助要請の研究を行っている若手研究者の発表を中心としながら、指定討論者には水野治久先生を迎え、フロア全体での活発なディスカッションを通して、様々な領域における、より望ましい援助の提供の在り方について考えていきたい。